

「大切に、大事な弟」

敦賀市立松陵中学校 1年 西村 直真（にしむら なおま）

僕には、弟がいました。八年前、僕たちの家族に新しい命が生まれたのです。みなさんは、「新しい命」と聞いて、どんな子を思い浮かべましたか。元気に泣いている子。すやすや眠っている子。そんな姿を思い浮かべたのではないのでしょうか。でも、僕の弟はそうではありませんでした。生まれつき、障害を持っていたのです。

今から八年前、母のお腹に新しい命が宿ってくれました。僕はとても楽しみで、赤ちゃんの姿や、赤ちゃんが生まれた後の自分の家族の様子を思い浮かべていました。

やがて月日は流れ、母は入院し、僕たちきょうだいは祖父母の家に預けられました。その時はまだ幼く、母が恋しかったのですが、毎日がまんし、赤ちゃんが生まれるのを心待ちにしていました。しかし、それまで順調だった赤ちゃんの容体が急変し、母はさらに遠くの病院に入院することになりました。そして、ついに生まれたという知らせが届きました。僕はほっとしました。数日後、母が帰ってきました。しかし、赤ちゃんはそこには居ませんでした。「いっしょに連れて帰ってこれなくてごめんね。」と母は言いました。僕は複雑な気持ちでしたが、母が帰ってきてくれたことで安心できました。

そして、ついに家族全員で弟に会いに行くことになりました。弟はまだ入院していたので、僕は車に乗っている間、少しどきどきしていたのを覚えています。消毒をして病室に入り、弟と初めて会えました。「かわいいね。」という言葉が、自然に出てきました。もしかしたら、周りから見ると健康な赤ちゃんとは少し違い、不自然なところがあるのかもしれませんが、僕たちはそうは思いませんでした。むしろこのままがいいと思いました。障害がある限り、長くは生きられない。そう分かっていたから、僕たちは弟を大切に育てようと思ったのです。

それから半年が経って、弟は退院することができました。弟は家ではほとんどベッドにいましたが、僕たちのそばで過ごすことができました。時々様子をみてくださる方も来て、毎日がより楽しくなりました。僕も弟をなでたり、いっしょにおもちゃで遊んだりして、弟が毎日楽しく過ごせるようにがんばっていました。

でも、弟はまた入院することになってしまいました。おそらく体調の悪化が原因だったのでしょう。僕はさみしい気持ちになりましたが、弟にがんばってほしいと思うとともに、家族みんながいっしょに暮らしているのが決して当たり前ではなく、大切なことなんだとあらためて感じました。

やがて弟は転院し、僕たちは数週間に一回、弟に会いに行きました。クリスマスやハロウィンなどのときには、仮装やパーティーもしました。病院のイベントではいろいろな患者さんを見かけることもあり、その中には障害がある人も多く見られましたが、どの人も楽しそうにしていました。弟もそんなにしゃべることにはできないものの、とても楽しそうでした。

僕たち家族は、弟が入院している病院がある市内に引っ越し、新生活が始まりました。僕も小学校に入学し、家にいる時間が短くなりましたが、その時間をけずって弟に会いに行きました。弟は時々動いたり声を出したりしてくれて、僕はとてもうれしくなりました。

ある日、僕たち家族は、もうすぐ夜だというのに弟に会いに行きました。めずらしく、家族全員で集合写真を撮り、しばらくみんなで過ごしました。やがて帰る時間になったのですが、父と母は病院に残るということでした。僕は疑問を感じながらも、祖父母といっしょに家に帰りましたが、正直なところ、とても不安でした。その夜寝る時に、もしかして弟はこのまま死んじゃうのかな、いや、今死ぬわけないや、と自分を励ましたのを今でも覚えています。そのおかげか、ぐっすり眠ることができました。

次の日、僕が目を覚ますと、家が静まりかえっていました。一階に降りると、父と、母と、弟がいました。僕は思わず「退院したの!?!」と聞きました。「体はね。でも、魂はお空へ行っちゃった。」と母は言いました。信じられませんでした。とても悲しくて、さみしくて。でも、弟は生まれてから三年間、つらいことも苦しいことも乗り越えて、がんばってくれました。だから、僕は心の底から思いました。「ありがとう」と。

僕は、当たり前のように生活できていることがとても大切なんだと、弟から教わりました。家族みんなで過ごすこと、そして、一日一日を楽しむこと。僕は、その一つひとつを、これからも大切にしていきたいと思います。